

かつての鳥取地方における牛馬治療の状況（私見）

森 徹士[†]（もり動物クリニック院長・鳥取県獣医師会会員）



1 はじめに

鳥取県（因幡・伯耆地方）における牛馬の歴史は古く、延喜式（927）兵部省「諸国馬牛牧」に18カ国39牧の名が挙げられており、その中に「伯耆国^{註1}古布馬^{註2}牧」が書かれている。現在の古布馬^{註3}庄で東伯町別宮（現琴浦町）の地籍図には上馬野、馬野、東馬野の地名が残されている。そして平安時代には官營の牧場があって、ここで育成された牛（4、5歳）、馬（5、6歳）を毎年左右馬寮に進貢していた。東伯町誌によると『宇治川の先陣争い』（1184）に使われた「いけづき」「するすみ」の2名馬のうち「するすみ」はこの地の産と言われ、「馬野の小馬」の伝承も残されている。また大山博勞座での牛馬市は古く且つ規模が大きく、福島の前川馬市・広島久井の牛市と並んで、この当時の日本三大市場^{註2}と呼ばれる程隆盛であったという。この大山の牛馬市は、平安末期に大山寺の基好上人が大地蔵菩薩を「牛馬守護の仏」であると唱えたところから、牛馬安全の守護札を受けに参詣するようになり、その祭礼の折に牛馬市が立ったと言われている。この牛馬市は鎌倉時代より明治年間まで盛んであって、中国・四国・近畿地方より数万人の参詣客と1万頭を超えた牛馬で賑わったと伝えられている。また『因幡民談記』（1743）によると、因幡地方の牛は京都の“車牛”として移出されていたと言う。現在因伯牛と呼ばれる和牛の生産も、この大山の牛馬市に由来するところが多いと考えられる。

江戸時代の牛馬の殆んどは農耕用であった。一般農家において役用として主に牛を飼育していたが、日野地方（鳥取県西南部）の農家は牛より馬が多かった。馬は鉦鉄^{たたら}生産、殊に鉄山の鉄穴^{かんな}流しや木・炭の運搬に必需であった。また兵馬用に藩の武士に必要とした。その為藩は倉吉荒尾家に、馬医として代々山形、堀江の2家を召抱えさせていた。鳥取藩の馬医について詳しくは判らないが、寛文11年（1671）の組帳に荒尾志摩（倉吉、荒尾二代目）の家臣に馬医、入江源八の名があり、その後前記の2馬医家となっている。東伯地区で江戸時代も兵馬用の馬の育成が行われていたと思われ、その名残りが

明治以降の農林省鳥取種馬場に継承されたのであろう。

鳥取県立博物館には鳥取藩の当時の馬医書が残されている。それによると藩の馬のみならず一部民間の馬の治療も行われていたと考えられる。しかし牛に関する治療の殆んどは民間の治療経験者や伯楽・博勞により行われ、伝承の民間治療や神仏への祈願によったと思われる。この地方の牛馬の守護神として、東伯郡赤碕町（現琴浦町）の神崎神社への信仰がある。神崎神社は一名荒神とも呼ばれ、古くは三宝大荒神と称し「牛馬の神」として近在の農家は勿論中国地方の各地に代参講を持つ程の信仰を得ていた。

牛馬の疾病に多くの治療費を要したり手数をかける事は割に合わないという実利的な考えから、民間薬療法や物理的治療が主で、それを専業とする馬医・牛医などは一般には殆んど無く、農村地帯の経験者（伯楽、博勞、馬喰）による手当がなされていた。牛馬安全の祈願や祈禱など御札（護符）を授かって置く事もその習俗であった。また地域の医師がその治療の相談に応じていた場合も多く見られたという。牛馬の民間治療については、先に坂田友広著の『中国四国の民間療法』（昭和52年）の中に“家畜の民間療法”と題して牛の民間療法の論文があるが、それを補足する意味で主に伯耆地方（日野郡及び大山周辺）より集めた治療法を症状別に書き加えてみた。それらは主に地元の博勞（馬喰）による行為と考えている。通俗的に用いられる「ばくろう」が差別的用語であるか否かは別にして、伯楽と区別して扱われたと考える説も確かにある。しかし（治療分野と商業面が）分業化する以前の博勞の多様性を考えたら、獣医師の前身（の一つ）として寛容に考えるのも大いに趣きがあると思われる。その点を十分御理解の上、先人たちが築き上げた足跡に関心を抱いて頂ければ幸甚である。

2 各疾病の治療法

(1) 牛

ア 食道梗塞

- ・食物を喉に詰まらせ時に、カツラの木の先端を潰して食道に押し込む。

イ 鼓脹症（コシ）

- 第一胃内にガスが異常に充満した状態。

[†] 連絡責任者：森 徹士（もり動物クリニック院長・鳥取県獣医師会会員）

〒680-0864 鳥取市吉成779-17 ☎・FAX 0857-53-5323 E-mail : t-t-mori@nen-t.net

- ・針治療をする。
- ・針治療とガス抜き（女竹を切って穴を通し、これを口から突っ込む）をする。
- ・左臍部より第一胃内に針を刺し、さらに竹を誘導し直接ガスを抜く。
- ・軽度の場合や第一胃食滞には、キワダの煎汁（ネリグマ）または梅酢（原液または薄めて）を飲ませる。またはカボチャや芋等の餌を止めてクマ笹の葉を餌として与える。
- ・腹部をマッサージする。

ウ 下痢症

- ・キワダの樹皮を乾燥させておき、それを煎じて飲ませる。
- ・ゲンノショウコを煎じて飲ませる。
- ・渋皮のシブを内服させる。一夜後布で濾したものを薄めて用いる。
- ・炭を飲ませる。
- ・クマ笹を餌とする。
- ・梅酢を飲ませる。
- ・針治療をする。
- ・腹部をマッサージする。
- ・キワダと黄连（7：3）を煎じて飲ませる。
- ・カシの木の葉を食べさせる。

エ 寄生虫

(ア) シラミ

- ・馬酔木^{アセビ}を煎じてその汁を付ける。

(イ) ハゲ

- ・尾根部に出来るハゲは主に疥癬症による事が多く、桐を炭にして油と混ぜて患部に塗布する。

(ウ) 火虫

- ・患部を焼石などで焼いてその跡に硫黄を塗る。

オ 皮膚病

伯耆地方ではワヒ（倉吉周辺ではヒ）、因幡地方ではヒと呼ばれ、またコセとも呼ばれた。主に皮膚病全般を指し、牛毛包虫症・マイクロフィラリア症或いはイボ・アマジシ・象皮病・湿疹などを含めてワヒ、ヒと呼んでいた。

- ・ハトムギ（シラメシバ）の煎汁で洗う。
- ・モグラをイチジクの葉で包み蒸し焼きとして食わせる。
- ・モグラの黒焼、または生をすり潰して食べさせる。
- ・イモリを生のまま12匹飲ませる。
- ・硫黄を塗る。
- ・イボは切り取る。
- ・ホウトク（放線菌症）は周囲に針を刺して醤油をすり込む。または煮え油を注ぎ、その後ドクダミを塗る。
- ・キワダの樹皮を煎じて飲ませる。

- ・「牛のひぐすり」を飲ませる。
- ・ダガラシの葉・茎をすり潰して患部に付ける。

カ アマジシ

乳嘴腫、乳頭腫の事で主に乳頭・顔にできるイボ。

- ・ハトムギを粉にして飲ませる。
- ・ハコベをすり潰して汁を付ける。
- ・米子の妹尾家の秘方は「ヨモギ、スギナ、フキ、スイバ、ハハコグサ、クサノオウ」の7種の薬草を塩で揉んで、その汁を塗布しながら指と爪で擦る。（「中国四国の民間療法」による）
- ・麻糸でイボを巻き付けて壊死させて脱落させる。

キ あしいた

牛のマタグサレは趾間腐爛を指し、処置は大体馬の場合と同様である。跛行を示す疾患全般に使った。

- ・患部に味噌を挟んで藁ぐつを履かせる。
- ・足首の腫れたのに瘤の生えた「ツツツンカツラ」と川菖蒲を煎じて患部に湿布したり、焼き小便を塗布する。
- ・上顎に針治療をする。
- ・灸或いは焼き火箸で焼く。
- ・牛や馬のマタグサレや踏創に、松脂に火を点け流れ出た液を直接患部に付ける。
- ・同じく菜種油を竹の皮に入れ火を点け、流れ落ちる液を患部に注ぐ。
- ・フクギ（葉・樹皮・幹）、石菖、ドクダミを煎じて「吸い出し膏」として用いた。

ク 発熱疾患

- ・山人参と芍薬を食べさせる。
- ・ミミズを煮て食べさせる。
- ・生のミミズを飲ませる。

ケ その他

- ・一般外傷には焼小便（人尿を泥状に煮つめて塗布剤として使用）を塗る。
- ・子宮脱には渋柿の樹液を内膜に塗布して元に戻す。
- ・咳止めには雨蛙をビワの葉に巻いて生のまま食べさせる。オオバコの葉を煎じて飲ませる。
- ・強壯剤としてドジョウを生で食べさせる。マムシの骨を乾燥させて内服させる。
- ・産後狂躁は「ちのみち」と称して尾の先端を鎌で切って瀉血する。酒またはテリアカを飲ませる。
- ・産後疲労にはズイキの茎・葉を煎じて飲ませる。または米、味噌を与える。
- ・日野地方の放牧牛に発生した霧酔病（？）には蹄と蹄との間（趾間部）に針を打って瀉血する。
- ・骨折には柳の木を簾状に編み、骨折部にあて固定する。
- ・鞍傷にはウドン粉を酢で練り塗布した。化膿したものにはドクダミを潰して塗ったり、布に塗って貼る。

- ・カモタ、カモ（不妊症の総称として）や深刻な不治の病など、手当方法が無い場合神仏に頼る。

(2) 馬

ア はらいた

疝痛症状を呈する胃腸疾患。昔から「ないら（内羅）」と呼ばれるものには、日本の病名であって中国の医書には無い。広く内臓一般の病気を指しており、「ないら薬」には種々の薬方がある。民間薬にしても同じことが言える。

- ・便秘によるものには腹部のマッサージを行う。
- ・レンゲ（紫雲草）を食べさせる。
- ・甘茶を飲ませる。
- ・梅酢（そのまま、または薄めて）を内服させる。
- ・激しい腹痛の折には焼酎を飲ませる。
- ・下痢の時には乾燥保存したキワダの樹皮を煮詰めて飲ませる。キワダの樹皮と米を餌に混ぜて与える。
- ・上顎や耳に針（鍼）治療をする。

イ あしいた

跛行を呈するもので、筋炎・腱炎または蹄病を指すが、時には捻挫程度のものから重度の蹄又腐爛に至るまで幅広く使われていた。

- ・針によって瀉血する。また更に瀉血部分にびんつけ油を塗布する。藤の木をつるに出来た瘤を煎じて内服させる。
- ・患部にマンジュシャゲの球根をすり潰したものを塗布する。
- ・尾根部の内側又は尾骨先端に針治療をする。
- ・ドクダミの葉を揉んで付ける。
- ・焼石で焼烙する。
- ・セキショウ・クスノキ・フクギを煎じた汁をウドン粉で練って湿布する。
- ・モグサで灸をする。

ウ ひむし（火虫）

昔からある言葉で農耕用の牛馬に多く、痒さの強い寄生虫性の皮膚病とされていた。顆粒性皮膚炎を指す。

- ・花崗岩のような脆い石を焼いて患部の皮膚を焦がす。
- ・硫黄を油に溶いて付ける。

エ またぐされ

蹄又腐爛を指すが、一般には蹄病全般を指していた。

- ・焼小便（人尿を泥状となるまで煮つめて外用薬とする。または人尿のタゴ^{註3}の中に焼き石を次から次へ投げ入れて沸騰させて濃縮する）を塗布する。
- ・焼火箸で患部を焼く。
- ・ドクダミの根をすり潰して患部に付ける。
- ・針治療をする。

オ 産後狂躁（ちのみち）

分娩の疲労回復や胎盤停滞の予防も兼ねた。

- ・尾の先端を鎌で切って瀉血する。

- ・ズイキの茎葉を煮て、米・味噌と混ぜて与える。

カ 外 傷

- ・焼酎を吹きかける。
- ・焼小便（「またぐされ」の場合と同様の作り方）をつける。

3 牛馬の売薬

鳥取県史(7)によると、享保10年(1725)の「在方諸事控」(鳥取藩政資料)に次のような記録がある。

『覚。十二月晦日限、八橋郡下市村居住、梅里梅庵、一、牛薬 右御両国村々相対売、御免なされ候間勝手次第調べ申すべく候、此者日に行き暮れ候はば、何方にても一夜の宿借し申すべき者也。享保十巳四月』

とあり、享保10年頃既に牛馬用の売薬または薬種行商人がこの地に居た事を示すものである。青谷町(鳥取市西端)や鳥取地方は藩政期末より明治・大正にかけて売薬製造・販売が盛んで、富山方式の配置売薬もかなり広範囲に行われていた。それに伴って牛馬用の売薬もあった。有名なものに「牛のひぐすり」「てりあか^{註4}」「しらみ取りぐすり」があった。これらは大山の博労座で、牛馬の売買・因伯牛の生産に伴って当地の名産となり、売薬行商人によって中国地方一般に販売されていた。「牛のひぐすり」の版本は幕末時代のもので郡家町落岩の薬種商である岡垣家に所蔵され、一般売薬とともに市販されていたと思われる(図1)。昭和4年頃、県内で発売されていたものに「牛のひ薬」(鳥取茶町 吉田一陽堂)、「牛のひぐすり」(鳥取立川 桜井重一)、「牛馬活力散」(ひの薬：鳥取吉方 林米造)、「牛馬脾薬」(消化不良：鳥取若桜 平井義清)、「牛のひぐすり 芍薬湯」(鳥取行徳 吉村実夫)、「牛馬ひ薬」(胃腸カタル：岩美浦富 小谷武治)、「牛の脾薬」(倉吉町 新藤百蔵)などがある。これらの処方内容は明らかではない。テリアカについては、青谷のテリアカが藩政末期より全国的に有名であった。これを牛馬に応用して牛馬用の「てりあか(照明)」があったという。

4 因幡・伯耆地方の医薬書・経験方にある牛馬用民間薬

鳥取県立博物館所蔵の鳥取藩の『馬医方』、『安驥集』には薬方・経験方について詳しく記してあるが、専門書である為敢えてここでは触れない。

(1) 安永6年(1777)、鳥取古市の医家太田垣家の「牛のひ薬」(図2)：楊梅皮、香附子、檳榔子、山梔子、川芎、茯苓、六味、熱アレバキリン血、石膏ヲ加エテ良シ。

(2) 寛政12年(1800)、谷口孫平著「牛馬之医書」(図3)、気高郡網見村(青谷町)中島家、牛馬医の「牛のひ薬」：莪朮、川芎、檳榔子、桂心、黄柏、山梔子、



図1 郡家村落岩の岡垣家の版木

黄連、薄荷、苦参、辰砂、大黄、酢を加える。

(3) 幕末中期より幕末時代、鳥取の薬種商大和屋（大村薬局）「牛のひぐすり」：①山帰来、辛夷、黄柏、大黄、木通、苦辛、当帰、②山帰来、辛夷、黄柏、苦辛、木通、忍冬、当帰、大黄、③「牛の皮薬」：黄連、黄芩、山梔子、黄柏。

(4) 明治前後、鳥取立川の高田薬店「牛肥薬」：国皮、柴胡、莪朮、紅花、甘草の五味。「牛痞薬」：当薬、山梔子、黄葉、樟葉、桂皮、毛黄連、宝香（?）、青木香、サイカチ、十葉、楊梅皮、枳殼、苦辛、大黄、黄芩、紅花精、山芍薬、国皮、川原柴胡、莪朮、紅花、瓜呂根、二十二味。

(5) 昭和17、18年の売薬統制による鳥取県製薬の「牛のひ薬」：重炭酸ソーダ10、食塩15、炭酸石灰25、延命草末5、陳皮末5、適応は健胃・整腸強壯・馬の骨軟症。この薬名と処方内容を見ると、この地方でいう牛の皮膚疾患ばかりではなく、内臓疾患をも含めた牛の病氣と解されなくもない。

(6) 昭和24年、青谷の玉川薬店の「てりあか」：益智、竜腦、牛胆、柴檀、胡椒末、甘草、グリセリン、メントール、葛根、弁柄、縮砂、川芎、サリチル酸、蜂蜜、丁香、桂皮、生姜、アルコール、木香、水飴、黄連、黄柏の二十二味で、牛馬産前産後、胃腸カタル、下り腹。成人の三倍乃至十倍量投与。

(7) 昭和24年、鳥取県製薬の「牛馬しらみ取り薬」：馬酔木末120、炭酸石灰20、硫黄末10。

(8) 前記、絹見村中島家の「牛馬之医書」より処方例を抜粋する。

- ・食傷：「甘草、黄芩、白朮、香附子、木香、葛根、瓜呂根、苦辛、黄連」

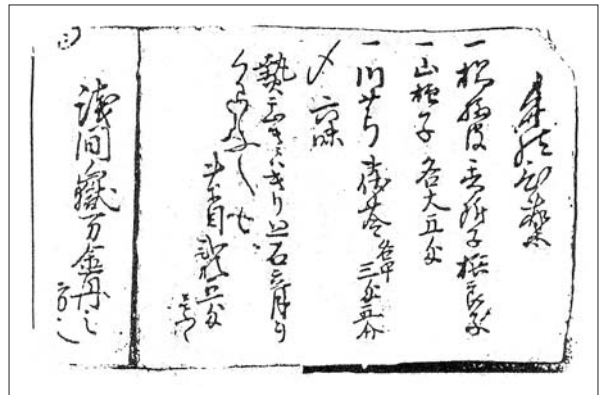


図2 鳥取市古市 太田垣家「薬方集」



図3 絹見村 中島家「牛馬之医書」（米子：村尾家藏）

- ・こし病：「石膏、爐甘石、白芷、山椒の実の皮」、「しおだい（塩鯛?）、あかにしの黒焼、になの黒焼、やたてなすびの木、いなごの黒焼、酢、塩」
 - ・腰切：「辰砂、石膏、煙焰、爐甘石、寒水石、なすびの木の灰、青木葉の黒焼、仙人草黒焼、白焼、莪朮、酢」、「鶉の灰、辰砂、石膏、赤にし酢」
 - ・熱症：「柴胡、甘草、半夏、芥麻、葛根、瓜呂根」、「かうか（ネムの木）の葉、益母草、芍薬の葉、黒焼」
 - ・牛の傷いやし：「仙人草、黄柏、乙切草、柳」を粉にして振り掛ける。
 - ・下り腹：「うつぎのあまはだ、茯苓、うのはい、びわの葉、赤つち、こえ松の炭、味噌」を焼き用うべし。
 - ・牛腹はる時：「しそ、莪朮、知母、黄柏、山梔子、陳皮」
- (9) 東郷町の在医師徳田家の経験方より
- ・牛腹下りて止まざる時：「うつぎの実、香附子、荊子、黄連、芍薬、桂枝、烏梅、大棗、ふし、味噌」を茶にて用う。
 - ・牛馬ないら薬：「馬天石、楊梅皮、黄柏、呉はつ葉（?）」
 - ・牛腰切、口伝、血塊にもよし：「大黄、苦辛、当薬、

黄柏，辰砂，馬天石，中膝，牡蠣」但し血塊硝を加う。

解説困難だったり未確認・不詳の薬剤（材料）がいくつかあるが、これらの処方例は医方または馬医方の影響が強い。「牛馬之医書」には牛の病証，薬種の効能や処方例約70種が書かれている（米子市道笑町 村尾家所蔵）。絹見村の中島家は民間の牛馬医（伯楽・博勞）であったと思われるが確かではない。民間療法には、これらの他にマジナイや俗信が多い。例えば横になって食事をしたり，食後すぐに寝ると牛になる（角が生える）。馬の糞を踏むと背が高くなる。馬の蹄鉄を家の出入口の柱に掛けて置くと家が繁盛する等があるが、今回の主旨と異なるので省略する。

5 あとがき

「各疾病の治療法」の項は、昭和50年代において主に鳥取県中西部の年配の獣医師並びに関連職種（人工授精師・削蹄師・畜産農家等）の古老複数を対象に聞き取り調査を行ったものである。具体的にいつの時代で何処の誰の手によって行われていたのか等の詳細は、今に至っては殆んど判らない。その為年代を明記するのは控えたが、恐らく幕末から昭和初期において「博勞」と呼ばれた人々による「医療」行為だと推察される。そして当然の事ながら当時用いられた手技・処方のすべてを書き記せる筈もなく、ここに載せた諸々の治療法はごく一部に過ぎない。またこれは基本的に訪ね歩き個別聴取した質問形式による調査である。消えかけた遠い過去の記憶を辿る上で、不鮮明であったり著しく不自然さを感じたものは極力除外したが、中には家伝、秘伝とした技法もあったと思われる。そして方言（病名などの地域の俗称）も含め、この地方特有の治療法であったかどうか、他の地域のものと比較しない限り不明である。確かに山野草・和漢薬等の使用は至極一般的と思えるが、例え珍奇で特異的な手技と感じられる治療法であっても、彼らの広範な交易と長い歴史を通して、案外広く全国的に共通している可能性も多いに有り得るのではないだろうか。

辞書で調べる限りにおいて、博勞とは「伯楽・馬喰・伯勞とも呼ばれ、牛馬の品定め・売買・仲介或いは怪我や病気の治療を施した」とある。更に馬医、伯楽が医療行為に主力を置いたのに対して、副業的に携わったのが博勞・馬喰・狎屋（「狎」専門の繁殖家）だったとする書物もある。敢えて区分けする必要性の有無は別にして、これらの職種が近世に至っても資格制度の無い、看板を掲げれば誰でもなれる「標榜職」であった点は言うまでもない。しかし博勞が全国的に幅広く牛馬の治療に携わった事実是否定しようもない。過去の獣医療史を調べる上で、馬医（伯楽）が一部の公的文書や旧家の史料として保存されているのに対して、博勞（馬喰）の施療

の記録は文字として殆んど残されておらず、それだけに聞き取り調査に頼らねば情報収集が困難だったとも言える。

前述したように、昔京の都で牛車を牽いていた牛の殆んどが因幡国（鳥取県東部）産だったと聞く。当時の因幡地方の博勞たちがその売買・仲介から移動運搬に一役を担ったかと思いを巡らすと実に興味深い。そして山陰各地に今も残る博勞にまつわる伝承・逸話からも、彼らの行動範囲の広さと他国（他地域）との交易の深さを窺い知ることが出来る。それは本業である牛馬の流通だけに留まることなく物資とともに情報、文化をも同時に運んだ。その上で「博勞は我々獣医師の前身のひとつである」と主張するのだが、中には詐欺、恐喝を働く悪徳博勞や数十人もの追子を従えていた者も居たと聞くので、某組の親分のような悪いイメージを抱く人がこれを聞けば、この説は意見が賛否分かれる所かも知れない。室町時代の「医馬抄」^{註5}を始めその他の古文書・文献からも、大名・旗本・公家の上流階級層お抱えの馬医、犬医（狎屋）が実在し、彼らが動物たちの病気の治療に如何に献身的且つ奮闘努力したかを物語る記録も確かに残っている。しかし広く世に貢献したその殆んどは、牛馬の病気全般に精通した博勞たちの活躍による所が極めて大きいと言わざるを得ない。現在の「家畜商」が最もそれに近いかも知れないが、必ずしも「博勞＝家畜商」とは言い切れない。現在でも彼らに対して通俗的に用いられる場合もあるかも知れないが、ここで言う博勞とは江戸期から明治・大正・昭和初期頃までを指す。少なくとも獣医師（または陸軍獣医官）が博勞の臨床分野に席卷するまでは、明らかに彼らとその重責を担って来たのである。それにしても博勞を知らない世代の獣医師が増えて来た昨今、語り継ぐべき必須情報として是非残して置きたいと痛切に感じられてならないのである。

注 記

- 注1 伯耆国：鳥取県中西部
注2 大分の杵築「若宮の市」を加えるとする説もある。
注3 肥料（肥え）として貯めて置いた人糞尿を汲む桶・容器。
注4 「てりあか」の語源は不詳である。ローマ皇帝ネロの侍医が改良したという万能解毒薬「テリアカ」に由来すると推察されるが確証はない。
注5 平成19年6月滋賀県教委は日本最古級の獣医書「医馬抄」を金剛輪寺（同県愛荘町）で発見した事を発表した。

参 考 文 献

- [1] 太田垣家，薬方集，安永6年
[2] 中島家，牛馬之医書，寛政12年
[3] 大和家，薬方集，藩政中期以降
[4] 鳥取藩馬医方医（鳥取県立博物館），藩政期
[5] 徳田家，薬方集，幕末
[6] 高田薬店，薬方集，明治前後

- [7] 県内売薬一覧表 (製品と売薬), 昭和4年
- [8] 在方諸事控 (鳥取県史7), 昭和51年
- [9] 鳥取県史1, 昭和47年
- [10] 大山町誌, 昭和55年
- [11] 東伯町誌, 昭和43年

- [12] 中国四国の民間療法, 昭和52年
- [13] 家庭菜全書, 昭和23年
- [14] 獣医学史, 中村洋吉, 昭和55年
- [15] 牛科撮要, 写本, 江戸後期